

がん患者の就労に関するシンポジウム～もし、あなたの部下が「がん(癌)」になったら～

日時:2008年9月7日(日)13時00分～16時30分/会場:東京ウイメンズプラザホール

主催:東京大学医療政策人材養成講座4期桜井班

共催:NPO 法人キャンサーネットジャパン/NPO 法人 HOPE★プロジェクト/NPO 法人ハート・プラスの会

■開会の挨拶

主任研究者:桜井なおみ(NPO 法人 HOPE★プロジェクト)。がんを発病したことで、約3割が職を失うという現実。働く意志があるがん患者の社会参加、雇用継続についてその実態と問題提起。HSPの研究・調査の背景や研究フローの紹介。

■がん体験者へのアンケート結果報告

共同研究者:吉田直子(日本経済新聞社)。がん患者へ行った就労実態に関するWebアンケート結果の発表。回答者の4分の3が「仕事を続けたい」とするうち3割が転職。また収入は約4割が減少と回答(診断後に転職したケースに限定すると6割超)。がん発症が仕事の継続・収入のマイナス要因となり、雇用不安を抱えていることが浮き彫りに。また「これまでの経験を生かした仕事」を望む人が半数を超える一方、「病気の経験を生かしたい」という人も4割と、がん患者の積極的な就労意欲が伺えた。

■がん医療施設へのアンケート結果報告

共同研究者:柳澤昭浩(NPO 法人キャンサーネットジャパン)。がん診療拠点病院に行ったがん患者の雇用、がん患者への期待等に関するアンケート結果の発表。がん患者の雇用は約3割が「雇用している」と回答(既雇用者を含む)。うち、がん患者の就労を「期待する・重要である」と回答する施設は7割以上(現在雇用がない施設でも5割強)。がん患者の就労要件については、8割が「主たる治療を終了し病状が安定していること」「がん医療に関心があること」を掲げ、「経験・国家医療資格・教育の有無」については「重要でない」とするところが多い。また相談支援センターの半数が相談員の人数・スキルともに不足していると回答し、サービスの提供が十分に出来ていない現状がある。がん患者の医療現場への受入啓蒙は進んできたものの、実際の参画は未だ途上である。

■がん専門施設への個別調査結果報告

共同研究者:山本尚子(千葉県健康福祉部)。がん患者の新規雇用の事例(相談窓口担当者・図書館司書)を紹介。患者・医療者の両サイドからの高い評価を得ている事例だが、本ケースは、本人の資質・適性、現場環境等の個別要因によるところが大きいと、がん患者雇用全体への普遍化は難しいとしつつ、医療機関における役割の不明瞭性、教育プログラムの未熟、低い給与評価、などの問題点を掲げた。医療機関内の「ピアカウンセリング」の問題点についても言及、強い期待がある一方で、患者が行うリスクを内包し、患者が患者支援を行うことの限界を指摘。ピア・サポート(患者支援)活動定着の為には、医療機関を離れた地域での活動を模索する必要がある、そのための財政支援を求めた。また他疾患(HIV/エイズ)の患者支援団体に対し、取り組み内容をヒアリングした内容を公開。その現状より、ピア(当事者)主導の更なる重要性を訴えた。

■がん体験者による経験談

◇松井亜矢子(NPO 法人がんネットジャパン)。大学卒業後、コピーライターの道を歩み転職のたびにステップアップを重ね着実にキャリアを積む。大手広告代理店でTVCMなどを企画制作、昼夜なく多忙な日々を送る中、30代半ばで乳がんを発症。「キャリアを捨てたくない」「経済的(治療費)不安」、などから、ホルモン治療の副作用を抱え仕事を継続したものの、発病より2年半後退職に至る。現在はフリーランスのコピーライターとして活動。大手広告代理店でのキャリアを断念した経験から「がんと共存できる環境だったら、辞めなかったかもしれない」と、社会のがんへの認識不足を指摘し、理解ある職場環境づくりを訴えた。

◇武田雅子(株式会社クレディセゾン)。二つの課長を兼務する多忙な日々の中、突然の乳がん告知。病気を周囲にオープンにし、上司や部下の理解・協力のもと、休暇を取得し3週間で職場復帰。入院中には部下が決裁書類を抱えて見舞いに、というエピソードも。復職後も変わらぬ多忙な日々を送り、ホルモン治療の副作用に悩まされる中、産業カウンセラーの資格を取得するなど更なるキャリアを積み、現在は人事部長として自らの体験を活かし、社員が安心して働き続けるための各種制度策定・メンタルヘルス対策などを手掛けている。「キャリアとは自分にとって生き方そのものである」と語った。

■パネルディスカッション～もしあなたの部下が「がん(癌)」になったら～

◇司会: 埴岡健一(日本医療政策機構)

◇パネリスト:

患者の立場から～石井典子(Re-bornの会)、桜井なおみ(NPO 法人 HOPE★プロジェクト)

行政の立場から～山本尚子(千葉県健康福祉部)

メディアの立場から～吉田直子(日本経済新聞社)

企業の立場から～武田雅子(株式会社クレディセゾン)

医療者の立場から～後藤悌(国立がんセンター中央病院)、市川和夫(社団法人日本自閉症協会)

さまざまな立場のパネリストより体験談や提言、事例の紹介。がん患者の就労問題解決には、がんという病への周囲の理解、企業の意識改革・制度整備、行政の支援などが不可欠であり、そのためには患者自身が声をあげて取り組むべきであると締めくくった。

■本研究の考察と提言

主任研究者: 桜井なおみ(NPO 法人 HOPE★プロジェクト)。がん患者の就労問題解決に向けた提言。「自分の意識を変える」、「企業・社会のがんへの意識を変える」、「制度の改革」。がんとともに歩み、自立し、その生を全うできる社会に、と訴えた。

■閉会の挨拶

共同研究者: 柳澤昭浩(NPO 法人がんネットジャパン)。がん患者の就労問題について「今日がスタートの日となれば」、そして「今後も本問題に取り組み続けていく」とし、企業の社会的責任(CSR)を唱え、閉会。

※敬称略

(以上文責: NPO 法人がんネットジャパン 澤本悦子)